

妙安寺だより

テレフォン法話 092(751)6084

と

昔、鎧櫃を開き、鎧の緘（おどし）は、絹か革なので放って置くと虫がつくので、ときどき空気を通す必要がありました。

その前に、お神酒と水で洗った米を供えました。後には、米の団子などを供えるようになりました。このお供えの中の一つが粽であり、柏餅でありました。

粽は、米の粉を練って、それを木の葉で包んだものですが、必ずしも笹や菖蒲の葉を使わなくてもよく、とにかく餅がくっつかないように木の葉で巻きました。ところが、菖蒲の節句ということもあって、後に菖蒲の葉で巻くようになりました。

現在の柏餅は、米の粉をついたものを延ばし、餡を挟んで柏の葉で包み蒸したものです。奈良朝時代には、団子を塩味だけで木の葉に包んで蒸したものを「伏兎（ぶと）」いい、わが国で最も古いお菓子です。

1200年の伝統を持ったお菓子が、進歩も退歩もせずに残っているのは珍しいことです。

粽も古くからあるもので、中国の戦国時代の楚の詩人・屈原（くつげん）が5月5日に汨羅（ぺきら）という川に、身を投げて死んだのを祀るために、粽を投げて祈ったという伝説があります。

粽は、菖蒲の葉を使うのは、蒸した米の粉がべたべたとくっつかないのを防ぐためと、解毒作用があるので使ったといわれています。

粽の形は円錐形をしています。中国では、これが人間を象徴していました。というのは、「祖先」の「祖」という字の旁（つくり）の部分の「且」が円錐形の象形で、偏の部分の「示」は神を祀るという意味で、祖先を祀っている姿が「祖」であるといえます。

だから、人間の象徴が「且」で、それが円錐形ということは、粽は古い時代の神様か人間の形を象徴したもので、それを川に投げて供養するというよりも、日本の伝統的な禊（みそぎ）と相通じる発想があったのではないかと思われま

檀信徒勉強会再開の案内

5月26日（月）午後1時より 「立正安国論を読む」

持参品 お経本 数珠 筆記用具 「立正安国論」の本

身延山総登参詣 参拝の案内

10月22日（水）～24日（金） 2泊3日

22日（水）は、午後2時より、身延山の本堂において「福岡県身延法要」が行われます。

22日福岡～羽田～身延（泊） 23日身延～諏訪湖～蓼科温泉（泊） 24日蓼科～中仙道～名古屋～博多

費用 78,000円（参加申込金 28,000円）

募集人員 80名（人員制限のため1カ寺5名）

締切日 8月末日（ただし5月末日に、80名に達した場合はその時点で再募集は行ないません）

お詫びと訂正

先月の案内の中の費用は、**78,000円（参加申込金 28,000円）**の誤りでした。

